

《受賞のことば》

吉田 誠



このたびは労働関係図書優秀賞を頂き誠に光栄に感じております。審査にあられた先生方には厚く御礼申しあげる次第です。また監修の労をとっていただいた遠藤公嗣先生と野村正實先生をはじめ、これまでご指導いただいた諸先生や多くの研究仲間にも深く感謝いたします。

さて、戦後初期日産の労使関係研究に取り組むきっかけになったのは 2000 年に日産争議当事者の方々と知遇を得たことでした。このとき、念頭にあったのは職場闘争や組合規制に着目した先行研究の枠組みでした。既に日産争議を対象とした立派な研究書が存在していました。容易に新しいことなど出てくるわけがないと思い、最初の数年はただひたすら彼らの話を先行研究の枠組みで理解しようとするばかりでした。今から振り返ると、彼らの言葉の機微に触れられていなかったように思います。

2003 年に手弁当で開催した日産争議 50 周年のシンポジウムを機に、元全日産分会員の浜賀知彦氏（1926～2011）の知己を得、氏が同分会の貴重な資料を収集された「浜賀コレクション」を拝借することになりました（現在はご遺族により東京大学経済学部資料室に寄贈されています）。これを活用して本格的な研究へと踏み込んでいくことができました。2007 年に全自の賃金原則（1952 年）を主題とした前著を上梓した後、一次資料を読むなかで生じてきていた種々の疑問に答えるために、それ以前の歴史へと遡っていくことになりました。そのなかで見えてきたのは、1949 年のドッジ・ライン期の人員整理を境に日産の労働組合の方針や人員体制が大きく変転を遂げたのではないかということでした。

資料を何往復もし、小さな発見を積み上げていくなかで、本書の骨格ができてきました。さっと資料を読んで図式を描けるほどのスマートさをもっていなかったため、15 年もの歳月をかけることになりました。そして、ようやく当事者たちから聞きとったことの意味が分かるようになり、彼らの言葉を置くべき場所を見つけたのです。

本書はこうした事実発見を積み上げたモノグラフなのですが、他方でその発見を梃子にいささか大胆な見解も提示しており、学界からどのような評価を受けるのか臆するところがありました。それゆえ今回賞を頂くことができたことは思いもかけぬことであり、喜びもひとしおです。今後の研究に向けて大きな励みになっており、改めて感謝する次第です。

よしだ・まこと 立命館大学産業社会学部教授。一橋大学社会学研究科博士課程単位取得退学、博士（経営学）。著書に『査定規制と労使関係の変容——全自の賃金原則と日産分会の闘い』（単著、大学教育出版、2007 年、日本労働社会学会奨励賞）。産業・労働社会学専攻。